

Gordon Campbell and Thomas N. Corns

John Milton: Life, Work and Thought

Oxford / New York: Oxford University Press, 2008, xiii + 488 pp.

Reviewed by Yuko Kanakubo Noro, Nihon University

2008年、John Miltonの生誕(1608年12月9日)400年を記念して、Milton研究の分野で優れた著作が数冊出版された。Nigel Smith著 *Is Milton Better than Shakespeare?* や、Phillip Pullman編 *John Milton: Paradise Lost*、Angelica Duran編 *A Concise Companion to Milton* などが挙げられる。また、Miltonの伝記も、Anna Beer著 *Milton: Poet, Pamphleteer and Patriot*、Neil Forsyth著 *A Biography*、そしてGordon Campbell and Thomas N. Corns共著の *John Milton: Life, Work, and Thought* の3冊が出版されている。この3冊の伝記は以下の点でそれぞれ他と異なっている。まず、Beerが描く伝記は、“Milton! Thou shouldst be living at this hour: / England hath need of thee.”で始まるソネットにおけるWordsworthのMiltonへの呼びかけを読者に思い起こさせるものである。簡潔に言えば、偉大な詩人の人生や作品を正しく認識することによって、Miltonの思想や活力、世界の難局や問題に対する姿勢を共有し、その姿を1つの模範として、読者は前向きな生き方を学ぶ。つまり、Beerのアプローチのベースは「共感」と言える。次に、Neil Forsythのアプローチは、いくらかBeerと共通する部分があるが、Neilは、Beerよりは客観的にMiltonの人物像を捉えている。また、彼は「なぜMiltonはこれほどにも人々に愛され、賞賛され、時にはひどく憎まれることさえあるのか？」(P.7)という疑問に答えることによって読者を楽しませてくれている。

一方、Campbell and Cornsはとにかく断固としてMiltonに共感しないという姿勢を貫いている。第一に、厳密に言えば、この2人はMilton自らが記した自伝的文章は、論争目的で書かれているという理由で取り扱いに注意が必要だとしている。そのような文章は、あくまでMiltonの戦略的執筆とみなされるべきだから、というのである。他の伝記作家たちの大部分がMilton自身の言葉をそのまま取り入れているなかで、このようなCampbellとCornsの叙述の手法は、彼らの伝記が異質なものであることを浮き彫りにしている。第二に、彼ら自身、序章で、この伝記が特別なものであると明示して以下のように述べている。“the historiography that underlies our understanding of the early and mid-seventeenth century...Stuart historiography has developed in the last thirty years with a vigorous and subtlety in comparison with which even historically informed literary criticism sometimes seems jejune” (P.2)。そして、*Milton Quarterly*の編集長であるEdward Jonesは *The Review of English Studies* (以下RES)の中で、「歴史資料からの根拠やスチュアート史を裏付けにした叙述」と述べて、「研究者であり教師である人々のための選り抜きの書」と断言している。第三に、CampbellとCornsは自分たちの伝記が、「性格に難のある、自己矛盾に陥った、横柄・短気・冷酷、野心家で狡猾な」人物としてMiltonを生き生きと描写していることを強調している。しかしながら、

Campbell と Corns は Milton の韻文も散文も共にしばしばおざなりに扱っており、論述対象 (Milton) に対する学術的な敬意を欠いているために、自分たちが達成したと主張してはいるものの、Milton の人物像を正確に描き出すことができていない。その理由は、この2人の伝記作家が Milton の自伝的な文章を含め、Milton の言葉を扱うことに慎重すぎるからである。彼らの手法は共感をほぼ排除する。しかしながら、人間が執筆する際に、執筆が対象から完全に共感を排除して描くことが可能なのだろうか？答えは「ノー」である。

Campbell と Corns の伝記の主張の内、三点について反論をする前に、Milton の伝記的研究に不可欠な3冊の著作に対して言及しておく。あらゆる Milton 研究者は、網羅的で最も優れた学術的な伝記として、David Masson の *The Life of John Milton: Narrated in Connection with the Political, Ecclesiastical and Literary History of His Time* (London, 1859-80, 全7巻) の名を挙げることだろう。それは、19世紀に書かれたものではあるが、今日に至っても Milton 研究の分野においてはその名声は鳴り響いており、その価値はあせてはいない。驚くべきことに、Masson は Milton の人物像を、分別のある、高貴で非常に洗練された清教徒として強く印象付けている。この伝記は7巻本という驚異的な内容量で極めて精緻に編まれ、Milton についての歴史的背景を研究するにあたり有益な伝記である。Masson の著書の第1巻が出版された時の読者の反応について、“Romantic Ecology”の主唱者である Jonathan Bates は、『種の起源』(第一巻と同年に出版された) よりはるかに大きな反響を呼んだ」と述べている。Masson は、Milton を時代の体現者にして、「代表者」であると捉えていたという。

次に、Masson と同様の構想を持つ包括的な伝記として挙げられるのは、J. M. French による *The Life Record of John Milton* (1949-58) である。この伝記は、Milton と彼の家族に関連する物事や出来事を時には日ごとに記録し、集積した記録を全5巻にまとめている。まとめられた資料は、驚嘆するばかりに豊富で、専門的に Milton を研究する者には不可欠な伝記である。3つ目に挙げられるのは、1968年出版の、William Riley Parker 著 *Milton: A Biography* (2nd ed., 2 vol. Oxford: Clarendon Press, 1996) である。これは Gordon Campbell が再編している。この伝記は Masson 以降の、最大規模にして、最も権威ある学術的伝記である。Masson の伝記と比べると、Milton の時代の歴史的背景の記述は短いが、彼の伝記は当事実在した資料をほぼ完全に網羅しており、それを筆者は自らの高く洗練された文学的な認識に活用している。Parker による伝記を超えるものを我々が得るまでには、百年かかると言われている。Campbell と Corns は、本書評の二段落前に引用した彼らの主張をから明らかなように、*John Milton: Life, Work, and Thought* を、先に挙げた3冊の伝記と比肩する、あるいはこれらを凌駕しようという意識さえが感じられる。

しかしながら、Jonathan Bates が指摘するように、「Campbell と Corns は、*Paradise Lost* といういわば、巨大な建造物を、歴史的にわずか過去の20年間の批評動向に限定してしまった」。また、彼らは Milton がヘブライ文化、ギリシア文化、ローマ文化から継承した詩的遺産さえも、余り注意を払っておらず、考慮も分析もほとんど行っていない。さらに Bates は「決定的に欠落しているのは、Masson の大著という祭壇の三本脚の第三番目、つまり、土

台となる文学的コンテクストが決定的に欠如している」と結論付けている。

そして、偶然にも、この伝記の欠陥に関する論者(野呂)の反論もまた、主に文学的背景に基づくものなのである。論者は、*John Milton: Life, Work, and Thought* が新たな Milton 像を提示するのに失敗していることを示すために三点を提示する。

第一に、この伝記には *Pro Populo Anglicano Defensio* (1651: 以下 *Defensio Prima*) のタイトルやその梗概について何度か触れることはあっても、その実質的な内容についての考察がほとんど見られない。この点に関しては、Milton がどのような概念を持っていたか、そしてどのような言葉で「自由」を表現しているかを考察するにあたり、注意深く詳細な言及がなされるべきである。Milton の甥である Edward Phillip によって “To Mr. Cyriac Skinner upon his[Milton’s] blindness” と題されたソネットについて、Campbell と Corns は “In liberty’s defense, my noble task, / Of which all Europe talks from side to side” という Milton の言葉を引き合いに出し、この言葉が Milton の虚構であると決めてかかり、「Milton のラテン語の弁護論は自由についてほとんど言及していない」(p.267) と無造作に言い放つのである。もし、*Defensio Prima* と *Defensio Secunda* (1654) に関する批評が、彼らの指摘どおりなら、「私たちの英雄」Milton は確かに「性格に難のある、自己矛盾に陥った、横柄・短気・冷酷、野心家で狡猾な」人物となるだろう。しかしながら、厳密に言えば、*Defensio Prima* と *Defensio Secunda* における Milton の “liberty” に対する言及に対する、Campbell と Corns の見解は、半分あってはいるものの、半分は誤りなのである。

一見すると、Laurence Stern による膨大で、集大成とも言える Milton の散文作品のコンコーダンスには、“liberty” という単語が、作品中で “liberty” の語について変化形をも含んで使用している主要な三作品、*Tetrachordon* (1645) から 28 例 (“liberty”、“liberties”、“libertie” のすべてを含む)、*Eikonoclastes* (1649) からは 55 例、そして *The Readie and Easie Way to Establish a Free Commonwealth* (1660) からは 51 例(第二版より) 引用がある。一方で、*Defensio Prima*、*Defensio Secunda* 共に “liberty” という単語が一つも引用がないとしている。というのも、当然のことながら、*Tetrachordon*、*Eikonoclastes*、そして *The Readie and Easie Way to Establish a Free Commonwealth* の三作品は、すべて「英語」で書かれている。Stern のコンコーダンスの正式名称は、*A Concordance to the English Prose of John Milton* すなわち、『ジョン・ミルトン著英語散文作品コンコーダンス』(下線論者)である。Stern が Milton の英語の散文作品すべてを掲載し、ラテン語作品を除外したことは論をまたない。それゆえ、Stern の “Guide to the Identification” には、*Defensio Prima*、*Defensio Secunda* そして *De Doctrina Christiana* は記載されていない。一方で、コロンビア大学出版(1932, 1933)の *The Works of John Milton* の第七巻、八巻によれば、*Defensio Prima* 中で、ラテン語 “libertas” (英語 “liberty” の相当語句) は、格変化形を含めて 60 例以上出現している。また、*Defensio Secunda* においては、30 例以上出現している。*Tetrachordon* 28 例、*Eikonoclastes* 55 例、*The Readie and Easie Way to Establish a Free Commonwealth* 51 例と比較しても決して少ない数とは言えない。さらに、上記に述べたコロンビア版 *Defensio Prima* の翻訳者 Samuel Lee Wolff と *Defensio Secunda* の George

Burnett は、ラテン語の“libertas” を英語の“liberty” に翻訳している。Milton がラテン語で執筆した *Defensio Prima*、*Defensio Secunda* が、まさに自由について、*Tetrachordon*、*Eikonoclastes*、*The Readie and Easie Way to Establish a Free Commonwealth* と少なくとも同程度は述べていると言ってよい。

第二に、*Defensio Prima* の主要テーマは、国王ではなく、国民が自分達自身の政治を選択する権利と自由を持つことを証明すること、そして、それによって英国人の「進むべき道を正当化すること」であった。そしてそれと同時に、国民が政治形態を選択する自由とは生得の権利として神から与えられたことを証明することであった。以下の引用は、*Defensio Prima* から引用した、Milton 自身の言葉である。内容に関して検証を加えたい。(英語翻訳はすべてコロンビア版に依る)

キリストご自身が、暴君どもの支配下に、人として生まれ、奴隷となり、受難という代価を支払って、我々に真実の自由を買い与えてくださったのであります。... それと同じ精神で我々が真実の心でもって自由を得ようと務めることを、禁じてはおいでにならず、むしろそうせよ、と大いに励ましてくださっているのであります。[新井明・野呂有子訳『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』(埼玉：聖学院大学出版会、2003) p.73 下線は論者による]

... すなわち、人びとはそもそもの初めに、国王を選び出すよりも以前に、たがいを守るために知恵と力を結集したのであります。それはまさに〔自然〕の権利にもとづいてのことでありました。さらに人びとはその権利にもとづいて、全人類に共通の安寧と平和と自由を保持するために、単数もしくは複数の人物を任命して、その他の人びとを統治させたのであります。(p.142 下線論者))

Milton の敵対者、Claudius Salmasius は *Defensio Regia* (1649)において、国王家父長制を根拠としてチャールズ一世を擁護し、王権神授説を展開しつつ、英国議会を、取るに足らないもの、神の法を脅かす冷酷な殺人・暴力集団として非難している。その一方で、*Defensio Prima* において、Milton は真の自由を手に入れるために、国民が暴政と迷信を打破しなければならないと主張している。さらに Milton は Salmasius を暴政の奴隷、盲目的な迷信の信奉者として非難している。というのも、「王権神授説」の概念こそが、単なる暴政と迷信の産物にすぎないからである。*Defensio Prima* において Milton が示しているものは、今日では常識へと発展したものであるが、Milton の時代においては、異端的な考えであった。国王が神を起源とし、神によって絶対的な力を与えられたという現代において迷信と見なされるものが当時の常識であった。Milton は自分が生きていた時代のみならず、現代世界においてもなお常識を実現させた。そして豊富な能力を人々に利用せず、ありあまる知識を独占す

る Salmasius を非難するのである。Milton の観点において、Salmasius は迷信の中に自らの能力を隔離し、擁護者となり、国民を国王と迷信の奴隷とさせようとするのである。それゆえ、Milton は Salmasius を奴隷の中の奴隷、あるいは豊富な知識はあるものの、分別その他を持ち得ない愚か者として糾弾するのである。

Salmasius に浴びせた Milton による誹謗について、Campbell と Corns は John Hale の主張に依りながら、このような弁論方法は、Milton の時代においては普遍的で当時の風潮であったと論じている。(p.233) しかしながら、Milton の時代の弁論方法については、賛辞と痛烈な非難の両方に関する、さらなる言及が必要であるように思われる。Donald A. Robert が *Complete Prose Works of John Milton*, Don M. Wolfe 編の第四巻 (New Haven: Yale UP, 1966) の introduction において要約しているように、賛辞の部分では、主題となる [イングランド] 国民の生き方の高潔さと高貴さと偉大さが讃えられるが、その一方で、攻撃の部分では真逆の (論敵の卑俗さと卑小さを攻撃するという) 手だてが採用されるのである。(p.540) それゆえ、Milton は猛烈に、厳しく、自らの敵対者を最も無骨な暴政の奴隷として誇る一方で、「英国国民」を偉大なる母国の解放者として高く賞賛しているのである。この基準からすると、Campbell と Corns による議論は的外れであるように思われ、Milton を単に賢く、狡猾な弁論者として、さらにはただ中傷することのみを得意とし、人の感情を害することを考えることこそ最上の擁護だとする Milton を描いていると考えられる。

さらに、この伝記で腑に落ちない点として、Milton が視覚芸術に興味がなかったという [誤]解をしていることである。Milton の学者であれば、1978 年に出版された Roland M. Frye の *Milton's Imagery and the Visual Arts: Iconographic Tradition in the Epic Poems* の学術的価値を否定する者はいないだろう。この書物において、著者は Milton の作品中に見られる “viewing” や “seeing the sights” といった言葉に焦点を当て、Milton の生きていた時代において、このような表現がよく、古代の遺物に関する言説、重要な建築物、そして別の芸術作品に対して言及されていることを主張している。(p.24) このようにして、著者は如何にして視覚芸術とそのイメージが Milton の詩の中で溢れているかを提示している。例えば、*Paradise Lost* (1667) において「Milton が好んでいたように思われるモザイク作品や別の石が散りばめられた作品」に関して Milton が頻繁に言及していたことは、視覚芸術との関係ある限り、*Paradise Lost* における Milton と彼のイメージこそ、Milton のイタリア旅行に大いに負っていることを、読者に納得させるという。(pp.23-37) 逆に言えば、*John Milton: Life, Work, and Thought* においては次のような不躰な表現を除き、この点に関しては一切の言及が削除され、以下の断定的表現ですべてを片付けている。「Milton が属する階級のプロテスタントの人間が、このような旅行[イタリアへの旅行]をしようとする事自体、比較的珍しいことであった。... 彼[Milton] は視覚美術に大して興味があったわけではなかった。」(p.101; Frye の本は膨大な引用文献リストの中には含まれていない。) Milton が *Defensio Secunda* において、イタリア旅行についての回顧録を述べている際に、視覚芸術についてほとんど言及していないのは確かである。だが、それは、Campbell と Corns 自身が指摘するように、Milton が

「イタリアで過ごした時間を回顧するというよりもむしろ、1654年の時点での政治論争が目的」となっているがゆえなのである。

第二に、*Epitaphium Damonis* (1639) を読んだ者なら、イタリアと大いに関連している視覚芸術に対し Milton が極めて強い興味を明白に示している詩句を目にするだろう。*Epitaphium Damonis* はラテン語の牧歌的悲歌の形式を採用し、Milton がイタリアに滞在していた間に亡くなった親友 Charles Diodati に捧げたものである。Milton はイタリアから帰国した数年後に、この詩を創作した。最期の連の 198-219 行において、詩に登場する主人公は、Manso が Milton に渡した対の杯のことを言及している。(Villa 侯爵 Giovanni Battista Manso はイタリア叙事詩人 Torquato Tasso と抒情詩人 Giambattista Marino の有名な後援者であり、ナポリで Milton を手厚くもてなした。) David L. Blanken が英語翻訳を行った。

Manso, who is not the least glory of the Chalcidian shore. A marvelous work of art they [the cups] are, and a marvelous man is he. An engraving with a double motif goes all around them: in the center are the waves of the Red Sea, and the perfumed springtime, and the extended shores of Arabia, and groves redolent of balsam. Among these the Phoenix, that divine bird unique on earth, glitter cerulean with parti-coloured wings, and watches Aurora ascending from the glassy seas. Another part shows the limitless sky and mighty Olympus, while here too (and who would have supposed?) Is Cupid with his quiver ringed in clouds, his coruscating arms, His torches and his bronze-tinted darts.... (カルキスの岸辺の最も誉れある栄光たるマンソー。あれら[の杯]は、素晴らしい芸術の業であり、そして彼もまた素晴らしい人間である。刻まれた二つの主題が対の杯に記されている。その中心には、紅海の波、香り立ちこめる春、広大なアラビア半島の岸辺、そしてバルサムが芳香を放つ森。その中に、この世で神々しく唯一の鳥、不死鳥が斑の翼で紺碧の空に煌めき、ガラスの海から昇るオーロラを見る。もう一方には、限りなき空と巨大なオリンポスの山を表し、その一方でここにもまた(誰が想い描いたのだろうか?) 雲の中で環になって震え、煌めく武器を携え、松明と褐色に色づけられた矢を持つクピードーがいる。...)

これらの杯は、アラビアのフェニックスとキューピッドという二重のモチーフを有している。杯の役割に関しては、John Milton French (vol. 1, p. 398) と W. R. Parker (p. 827) の両者が、杯、あるいは本の実際の一組を意味していると言及している。もしもこれらが本当の杯であるとすれば、その行は Milton が杯の彫刻を賞賛し、驚異的で絵画的な意匠を描出した例証となる。仮に杯が書物の比喻表現だとすれば、Milton はその素晴らしい彫刻——まさしく視覚芸術の一つである——のイメージを借りて、書物の内容を描いていることにならないか。*Life, Works and Thought* は、ただ機械的に三度、この牧歌的哀歌に言及している。すなわち、Campbell と Corns はそれを味わっているようには思われない。

第三に、私は次の問題を提出する。「Milton は本当に、結局のところ自己矛盾しているの

か」

私は、率直に Milton が時々自己矛盾的に、あるいは Campbell と Corns が主張するように利己的に振舞うという事実を認める。例えば、利己的で、哀れみのない、巧妙なものとしての Milton 像は、Campbell と Corns が、Milton 初期の詩作品の *chef-d'oeuvre* (傑作) である、*Lycidas* (1637) に焦点を当てる時、明白に浮き彫りになっている。この *memorial* (記念碑) 的な詩は、元々 Milton のケンブリッジ大学時代の知人の一人である、Edward King の死を悼むために、1637 年に書かれた。1645 年版においてその牧歌的哀歌を復刻した際、Milton は「そしてそれにより、おりしも高みにありし腐敗した聖職者の破滅を預言する」と書き添えた。同年、カンタベリー大司教であった William Laud が処刑された。彼は高位聖職者の位階の最高位を有しており、Milton を含む議会派議員党派に反対していた。Milton は彼の哀歌を、神々しくも予言的に物語化した、と Campbell と Corns は主張する。なぜならば、「1637 年にはその問題は、それほど明白であるようには思われなかったであろう」(p. 99) からである。ここで、Campbell と Corns は、一種の後知恵としての「Milton による、特定の作品の急場に合わせるための彼の人生とペルソナの形成の習慣である」と論証する。

Campbell と Corns は、*Defensio Secunda* における Milton の回顧的記述に言及して、読者に自己成型する Milton 像を提示する。というのも Milton は「イングランド内乱を伝える憂鬱な便り」(*the Columbia Milton*, p. 125) を受け取ったために、シチリア島とギリシャを旅行することを諦めたと述べているが、Campbell と Corns は Milton の言説を辛辣に分析して、当時、イングランドにおいて内戦は起きていなかったこと、Milton は家に着くまでに 6 ヶ月もかかっていること、そして当時ギリシャは Milton のような教養のある旅行者にとって観光に相応しい場所ではなかったと主張する。そこで、Campbell と Corns は、Milton が最初からギリシャなどに行くつもりはなかったのであり、彼が言説は、論争目的の後知恵として捏ち上げられたものだ結論付ける。Campbell と Corns の議論には説得力がある。そして読者は Milton の自伝風の文章を読む際には、慎重に解釈すること感情移入しすぎないことが必要であると確信することになる。

しかしながら、*John Milton: Life, Work and Thought* を読むことによって、読者は Campbell と Corns が描き出すはずだったのとはまったく異なる Milton の特徴を決定的に見出すことになる。Milton が教育した甥の Phillips 兄弟と Thomas Ellwood (クエーカー教徒の友人であり、Milton の生徒) に対して、彼は思慮深く、天性の教師として描出されている。青年の頃から隠居生活に至るまで、Milton は一貫して、彼らの勉強を監督し、かつ、喜びを与え、ラテン語の教育においても最初は語形変化の規則を教え、次ぎに文法を導入するというようにじつに巧みな教授法を考案したことが分かる。(p. 322)

かくして我々は、Milton が王政復古後に王党派から提示された王党派スポークスマンの職を固辞するさまを見て、彼が「自己矛盾」もしていなければ、「利己的」でもなく、不撓不屈の精神に満ちていたことを再確認するのである。Cyriack Skinner によると、Campbell と Corns は述べる。大赦法 (1660 年 8 月 29 日) の直後、Milton は政府高官の訪問を受け、王

政を弁護するよう求められた。以前、共和政府のために弁護した多くの人は、鞍替えした。その中には、共和政府において Milton と共に働いた神学者である John Canne、そしてジャーナリストであり Milton の友人である Machamont Needham もいた。続けて、Campbell と Corns は、王党派は、Milton が変節すれば、王政復古の意義が一層高まるだろうと考えた、と主張する。なぜならば、Milton は *Defensio Prima* を通して、大きな国際的名声を得ていたからである。(p. 309) しかし、Milton はこの申し出を断った。

最も魅力的で、サスペンスに満ちた章は、“Surviving the Restoration” である。読者は Milton が最終的に赦免され、その後、彼の傑作である *Paradise Lost*、*Paradise Regained* (1671)、そして *Samson Agonistes* を完成させることが出来たことを十分承知している一方で、読者の目は文書にひきつけられ、そしてこの章を一気に読みたいと思うであろう。Campbell と Corns は、綿密に裏づけのある事実を収集しており、Milton のもっともらしい感情的な事情に関する解釈や、脚色化されたものを差し挟もうとはしない。

Campbell と Corns は、Milton の環境とその絶え間なく変化する状況と周囲の事情を再創造することに成功している。伝記作家たちのほとんどは、冷静にありのままの事実を述べ続ける一方で、ただ Milton への愛から、思わず全体にわたって次に起こる出来事を経験してしまうのである。比較すると、*The Life of John Milton* (2000) においてなされた、「夏の間、数日毎に友人が、裁かれるべき特定人物に関する議論と判決の知らせを持ってくるたびに、Milton の感情は間違いなく急激な変化を起こした」(p. 399) という、Barbara Lewalski による、同じ一連の出来事に対する簡潔なコメントでさえも、読者の精神的緊張を解消し、Milton から読者の同情を逸らしているように思われる。どんなに猛烈にジェットコースターがあなたを表面的には危険な状況へと連れて行こうとも、Milton がこの時感じた死の恐怖が本当である一方で、状況が最終的に幸先のよいものであることが判明するのである。他方、Parker によるこの場面の書き方は、最初から Milton の生存をあらかじめ仮定しており、その結果、彼の読者達は、心配しないのである。Campbell と Corns は、Milton がいかにして、なぜ命拾いをしたのかについて、その理由と状況を分析する。

四つの不安定要素が、1660年8月29日に署名された大赦法から最終的に除外された33人を特色付け、それゆえに極刑の可能性へと向けられた。すなわち、彼らが、Charles I の裁判と判決の実行に直接的に関わったということ。彼らが、未だ危険であるとされたこと。彼らが新しい政治体制にとって、潜在的有用性がなかったということ。新体制の中に、彼らにとっての有力者の友人がほとんどおらず、あまりにも多くの強力な敵がいたことである。四つの点すべてにおいて、Milton の特徴は定められていた。(p. 308)

紆余曲折を経て、Milton はロンドン塔から釈放され、150ポンドを支払った。だが、Milton の親しい知人であり、国务会議の一員であった Henry Vane 卿、そして John Lambert 少将の二人は、「国王殺し」(チャールズ処刑に賛成してサインした人々)ではなかったのに、おそ

らくは見せしめとして、死へと追いやられた。一方で、何人かの国王殺しは釈放された。ここに、政治権力が有する複雑な性質の、真に迫った見本があるのである。Vane へのソネットにおいて、Milton は政教分離に関する彼の考えを賞賛し、*Defensio Secunda* において、Lambert をイングランドの解放者として激賞している。死は Milton のすぐ後ろにあったが、突然に彼を残していった。彼はこの結果を神の摂理と見なしただろう。二週間もの間ロンドン塔に投獄され、まして盲目であったこと、死の恐怖に脅かされたこと、そして釈放されたことを考えれば、自身の執筆した悲劇 *Samson Agonistes* における英雄のように、自分が命拾いした意味について自問し続けるのは当然であった。

Samson Agonistes について、Jonathan Bates は *Life, Work, and Thought* の書評 (*the Times Literary Supplement*, March 6, 2009) で「この伝記は、Milton 学者にとって大きな謎である *Samson Agonistes* の出版年の測定に失敗している」としている。しかし、Campbell と Corns は、徹底的に文書記録を渉猟し、矛盾点と盲点を説明したうえで、謎を未解決のまま読者側に委ねているのである。Parker がかつて推定した Milton の本詩劇制作期間は 1647 年から 1653 年のあいだとなるが、一方で、Lewalski は *Paradise Lost* の後、*Paradise Regained* 制作のころに *Samson Agonistes* を執筆したと力説している。

Bates と Edward Jones 双方が指摘するように、学生時代の Milton が“*asclepiads*”中に収めた無題の詩(冒頭が *Ignavus satrapam*; 「王たるもの寝過ぎしてはならぬ」のもの)について、Campbell と Corns は綿密かつ仔細な方法論で言及しており、これを読みこなすには相当の学問的水準を要すると考察している。とはいえ、Milton が学生のころすでにラテン語とギリシャ語を読みこなし、教師のさまざまな要求に応じて韻文を作り、韻律効果を試していたというながれに対し、読者なりの解釈を求めようとする、詩形の専門知識がないならなおさら、重苦しい状況に軽く気付くだろう。さらに、Campbell と Corns は、Milton の最初期の詩作品を解釈しながら、Milton がはやい段階で王政の問題に興味を抱いていたことを読者が感じとれるように工夫している。この点、二人の伝記作家はあきらかな意図をもって、幼少期から晩年にいたるまで揺るぎない堅実な人物として Milton を描いているのである。

さて、*John Milton: Life, Work and Thought* はまちがいなく、多年にわたる緻密かつ仔細な研究の成果である。本伝記は 1, manuscripts と 2, printed books and articles の 2 部構成で、前半は(アムステルダムの Universiteits-Bibliotheek からチューリッヒの Staatsarchiv まで) 80 ほどの公文書館や図書館が挙げられており、注釈付きの約 300 点の手稿と原書の一覧もある。これらの記録によって、公証人でもあった最上級生の John Milton が、最初の妻 Mary の父 Richard Powell に年率 8% で 300 ポンドのローン返済があった事実 (p.150)、オランダの定期刊行物によると Milton は「然るべき条件を受け入れて自由の身となった」事実 (p.317) を、Campbell と Corns は裏づけていく。

John Milton: Life, Work, and Thought はたいへんに取材源豊富な情報に溢れており、嬉しくなってしまうこともある。*Defensio Prima* の題扉の再プリント版の第二代 Bridgewater 伯によるラテン語の「*Liber igne, author furca dignissimi* (本書は焚書もの、著者は絞首刑もの)」

との献辞 (p.230) などで、読者が不意に出くわすのは、読者を楽しませようとする二人の伝記作家のお茶目で、トリックスター的一面である。第二代 Bridgewater 伯とは、姉 Lady Alice と弟 Thomas とともに *A Masque presented at Ludlow Castle* (1634) で兄役を演じた、当時 11 歳の John Egerton そのひとなのである (その *Defensio Prima* の写しは the Huntington Library 所蔵)。このような不意に出くわす驚きがこの伝記にはたくさん隠されていて、発見される瞬間を待っているのに、読者がうかつだったり、著者の要求するレベルに達していないばかり、貴重な宝物は発見されないまま、地中のジャガイモかただの土とおなじになってしまう。

さいごに、ネット上の評者による不満も考慮にいれるべきだろう。「[*John Milton: Life, Work, and Thought* の] 著者は、Milton の人生譚とはほぼ無縁の、無意味な記述の泥沼にはまり込んだままである。研究もけっこうだが、真に楽しい読書のために、本作品の細かな記述には大鉈を振るう必要がある」とのことである。ネット上の評者の不満には「それこそがまさしく、Campbell と Corns のねらいなのだ」とお答えしよう。たしかに網羅的すぎるくらいはあるが、Campbell と Corns は自分たちの手になる伝記がそれだけで自己充足的だなどと思っはてはいないからである。二人によれば「テキストと歴史双方の不安定性や未決性」は自明の理だからだ。Milton は自分で自分を入念に作りあげ、政治的に操っており、また Skinner と Phillips はそれぞれにとって Milton は「良き友であり養い育ててくれた叔父なのであるから、彼を弁護する熱心な同志の弁明」などという記録は疑わしいもので、これらの記録したいが好き嫌いのある人間の手による備忘録ていどのものだから、いくぶん恣意的なものとなるのである。*John Milton: Life, Work, and Thought* の扉頁で著者が告げているように、二人のやり方は Milton についての諸見解を「懐疑的に吟味する」ものであるから、Milton 像を構築する素材を取捨選択した自分たちのやり方についてもよるこんで懐疑的に吟味されるだろう。

昨今の文学理論は公汎で迷路のごときである。情報の洪水が読者に押しよせ、多くの批評方法が「テキストと歴史双方の不安定性や未決性」を支持している。ポストモダン理論やニュークリティシズムに遭遇した読者が、Comus の森で迷う Lady のような感覚に陥っても何ら不思議はない。

けれども、信頼に足る John Milton の伝記を読めば、読者がこれまで潜在意識下で作り上げてきた Milton 像を脱構築することができる。そして伝記作家の助けをかりて、我々は Milton を「新たな森、新たな牧草地」に置いて [新たな視点から] 見ることができるのである。それは苦勞に満ちてはいるが、喜び溢れる仕事である。この過程は妊娠・出産と似ている。自己の抱く Milton 像が全面的に有機的な、生きた人間として再度、認識 (妊娠・出産) するためには大きな時間が必要となる。が、認識 (妊娠・出産) にともなう喜びは筆舌に尽くしがたい。

Barbara K. Lewalski が自作 *The Life of John Milton* 中で明言しているように、「伝記作家と読者の数だけ Milton 解釈があつて然るべきだし、読者はその伝記の妥当性と洞察にもとづ

き判断を下す」のである。Lewalski のことばに促されて伝記読者は、自分の洞察や誠実さ (Milton の用語を採用すれば「正しき理性」) を最大限に活用するのである。

Milton を学ぶ学生は、僅か 1 冊の伝記で作家像を捉えたと勘違いして満足してはいけない。Milton の著作中で彼が自分自身について描写している箇所を読むときには、創造的な読み手として、できるだけ多くの Milton 伝を読み、より良い、より鮮やかな芸術作品となるように、つねに自分の Milton 像を振りかえり、磨きをかけ、作り変えながら、まさに Milton が自作に対して行ったようにして、読者自身の Milton 像を育んでいくよう勧めたい。